

## 学習内容等の検討と関連科目との連携の強化

家政教育・藤田昌子

### 1. 授業の概要・目的

初等家庭科教育法は、児童を取り巻く生活環境の諸課題・児童の実態と家庭科教育の関係性を踏まえ、現代の小学校家庭科教育の意義や課題、教育内容、支援方法等を理解し、小学校家庭科における授業実践に必要な基礎的な知識と教育実践力を身につけることを目的としている。具体的には、小学校家庭科に関わる諸課題に対する問題意識をもち、学習視点と方法の検討を行うとともに、教材研究・支援案の作成・マイクロティーチング・授業研究などを通して、実践力の育成を目指している。受講生は2～4回生の163名で、田中教員6回、谷本教員2回、藤田6回、テスト・総括1回の構成である。藤田担当(後半)の授業の目的と内容の柱は、家庭科の歴史的な動向を踏まえ、これからの家庭科教育の課題・あり方を考えるとともに、教材研究・マイクロティーチング・授業研究などを通して、実践力を身につけることである。授業構成は以下のとおりである。

- 1 家庭科における家庭生活領域
- 2 教材としての家庭生活領域
- 3 家庭科教育の歴史とこれからの課題  
教材としての消費生活と環境領域
- 4 教材としての衣生活・環境領域  
領域の統合、他教科との連携
- 5 グループ支援案づくり
- 6 マイクロティーチング、授業研究、評価

毎回の授業の振り返りと最終回のアンケート(授業全体の振り返り)をもとに、授業を検討する。

### 2. 授業を行う上での工夫および達成度

#### ①家庭科教育の理念・意義の理解

家庭科に対する認識不足などにより、家庭科に対する誤解・偏見は学校現場においても多々みられる。家庭科教育の理念・意義の理解を深めるため、単に講義するのではなく、教材研究・授業設計に学生が主体的に取り組むなかで、学生自身が学び取り、理解できるように工夫した(具体的な方法については②～④に示す)。

初等家庭科教育法を学ぶ前は、ほとんどの学生の家庭科のイメージは「調理実習」「裁縫(被服実習)」であり、「実習以外(座学)はつまらない」「あまりおもしろくない。実習でないとあまり興味がない」「机上での授業はいやだった」というものであった。しかし、この授業を受けることで、家庭科のイメージは次のように変わっている。

- ・児童の生活の中から問題提起を可能とする教科
- ・今よりもよりよい生活にしていくための教科
- ・現代の子どもたちに必要な教科
- ・子どもたちの「生きる力」を育てるために必要
- ・実践的なものに加え、自分の生活を見直していくもの。また、家族、地域へと行動の幅を広げられる。
- ・家庭生活、学校生活、社会生活すべてにかかわる
- ・環境や社会問題にも目を向けたマルチな科目
- ・幅広い可能性をもっている。環境問題や理科、総合学習にもつながりをもたせることができる
- ・実技のほかの学習内容についてこそ教師の力が出る授業なのだということ強く感じる
- ・発問や教具でいくらかでもおもしろくなる科目
- ・1つの題材において多様なアプローチができる

そして、最終回のアンケートにおいて「この授業を受けて学んだこと、身についた視点」として

・学ぶ前は、家庭科という科目をあまり重要視しておらず、それよりも国語や算数などの科目だけに視点を向けていました。しかし、この初等家庭科教育法を学んで、家庭科の楽しさを実感することができました。

・ただ、技術を身につけるのではなく、ひとりひとりがよりよい生活のためにどうすればよいかを学習できる素敵な授業なんだという大学生になって初めて思うことができた。

・家庭科といえば、印象に残っているのは、調理実習や被服実習といった実習関係のみでした。でも、今回家庭科を教える側として授業を受けてみると、家族や近隣の人との関わりといったように、人間関係の基礎となる部分を教えていたり、消費生活で環境についてまで教えていたりして、家庭

科というのは私たちの生活に本当に密着していて、生きていくために必要な最低限の知識や心構えを教えてくれる授業なんだと感じました。(中略)教える側から見ると、家庭科にはこんなに学ぶ意義や視点があったことを知ることができました。

・家庭科はただ衣食住について考えるのではなく、子どもの生活を改善するために勉強すること、という考えがとても新鮮でした。実生活に活かすところまでが家庭科の目標であることがわかりました。そのため、子どもの生活実態をきちんと把握しなければならぬことを学びました。

・技術的な面が強いと思っていた家庭科だったが、社会問題ともつながりが深く、これからの時代に必要な知識(ジェンダー、環境問題等)を改めて知ることができた。

・まず、家庭科のイメージが変わった。それによって、家庭科でどんな授業が行われるべきかを考えた時に家庭科の内容の深さを感じた。多くの授業案を見ていくなかで、それらが現代の社会の様子や子どもの実態に合わせたものであることが分かった。

・家庭科へのイメージが変わりました。調理実習だけでなく、家族生活や環境も大事な分野であると思います。

・家庭科=食事や栄養というイメージがあったが、実際は家族や地域とのかかわり、時間の使い方、消費と環境など、日々の生活全てをよりよくするものであることを学んだ。

というように、多くの学生が家庭科の本質、教科の特性などを学び取り、意識も変わっていた。

なかには「(家庭科は)別にいらぬと思う教科の筆頭だったが、すべての教科にはその教科でしか教えられてない特色があり、どれも必要だと思えるようになった。これまでは、自身が受けてきた授業のイメージからも家庭科は何となく女の先生がやるものだと感覚があったが、初等家庭科教育法を受け、『家庭科も教えられるようになりたい』と思えるようになった(2回生男性)」というように、意識が大きく変わった学生もおり、授業において工夫の効果があったと考える。

## ②家庭科教育の特徴を歴史的経緯からみるための聞き取り調査・レポート報告の実施

家庭科の歴史については、講義だけでは理解が深まらないと考え、冬期休業を利用し、「家庭科(家事、裁縫科等も含む)」の学習について聞き取り調査を行うという課題を学生に出した。聞き取りの内容は、学校段階、家庭科教員の性別・年齢、学習形態、学習内容、当時家庭科の授業を受けて感

じたことなどで、それをレポートしてまとめ、提出してもらった。翌週、対象者の性別・年齢ごと(20~70歳代)に家庭科の学習についてまとめていき、家庭科教育の歴史とそこから見える課題などについて検討した。

学生自身は小学校から家庭科男女共修世代であるため、多くの学生は家庭科が女子のみの教科だった時代があったことや、学習内容も自分たちが受けてきたものと大きく異なることを知らず、聞き取りをして驚いていた。また、家庭科は社会の影響を強く受ける教科であったことも聞き取りにより理解できていた。そして、学習内容はいつの時代も調理実習や被服製作のことはよく覚えているが、それ以外のことは印象が薄いということがわかり、自分自身のことも含めて、記憶に残りにくい、自分も好きではなかった領域(家族・家庭生活や消費生活など)の教材研究の重要性を理解していた。

この聞き取り調査は、家庭科教育の特徴を歴史的経緯から理解するため、そしてこれからの家庭科教育の課題や教材研究の重要性を理解するために有効な学習方法であったと考え、今後も続けていきたい。

## ③学生主体の教材研究・授業研究

教材研究などの際、学生自身にそれぞれの題材における学習の視点のポイントも考えてもらい、その後意見を集約、紹介したうえで、足りない視点を補足という学生主体の授業を行った。

「授業なので、授業設計のポイントなどをもっと言って欲しかった」という要望が初回の授業で1名から出たが、その学習の視点から考える力を身につけることを意図しており、授業を受け身で聞くのではなく、主体的に取り組んで欲しいと考えていたため、次回以降もその方法を続けた。初回は「難しかった」という多数の学生の意見があったが、そのなかでも「子どもの発問や反応、意識の流れを考えるのが難しかったが、支援案を作る際のいい勉強になった」「何のためにこの授業をするのか」その意図・目的を考えるのに時間がかかってしまいましたが、それさえ見つかればおおまかな授業の流れを作るのは結構簡単でした」「今まであまり自分で授業をつくってみるという作業をしたことがなかったので、少し難しかったです。でも、子どもの意識の流れを想像したり、楽しい授業を考えたりできて、おもしろかったです。」というように主体的に学ぶことができていた学生も見られ、2回目以降は先のような要望はみられなくなった。

そして、最終アンケートにおいて「初等家庭科教育法で学んだこと、身についた視点」にまとめてもらったところ、

- ・まず何よりも大きいのは、授業を受ける立場から、授業を教える立場に立って、物事を考えることができるようになった。

- ・この授業では、教師の視点から家庭科を学ぶことができた。『与えられたことをやっている』という印象が強かった家庭科に、考える材料を与える側に立てたことが新鮮だった。

- ・学習者、指導者の双方の視点から家庭科を学習することができた。

- ・教える立場に立った時、どのようなところに目をつけて指導すればよいのか、指導の仕方がわかりました。

- ・家庭科の教師からの視点をもてるようになった。
- ・実際に、支援案を作ったり、授業を考えたりはものすごい力になった。

という意見が多くみられ、今まで受け身であることが当たり前だと思っていた学生が、教える立場として主体的に授業をつくり出していくことで、支援者としての視点が身についたと考える。

また、具体的な実践例を活用しながら、教材に対して様々なアプローチをもてるように、この主体的な授業づくりを目指したことで、

- ・家庭科は他の教科や領域とのつながりが深く、視点次第で大きく内容が変わってくるのだなと感じました。

- ・一つの観点からだけでなく、色々な方面から物事を見て、教材を考えることができることを感じました。

- ・支援案作成の際、教材研究がとても大切だということがよくわかりました。

- ・実習ではない単元、消費生活や家庭生活についても題材や授業を工夫することで、児童にとって一番身近な問題なのでもっと印象に残せる授業ができるということを学びました。

- ・教師の工夫次第でどんなものでも楽しくなると感じた。

- ・授業を工夫することによって、机上の授業でも楽しくできるものなんだ！

という学生も多くみられた。さらには、

- ・普段の生活から、どのようなものが教材化できそうか考えながら行動するようになった。自分が楽しめるものは、児童も楽しめると思うので、そのようなものを教材まで昇華させる工夫を普段から考えていきたい。

- ・身についたこととしては、(中略)身の回りのものを見ているときに「これは家庭科の教材にどう

だろう？」と考えるようになった。

という意見もみられた。教材研究の重要性や教材研究・授業設計の視点の理解が深まり、また、日常生活のなかで常に教材化を試みようとする学生もおり、工夫の効果はみられたと考える。

#### ④受講生の意見・アイディアの共有

6回という限られた時間のなかで、約160名の学生がいかにお互いに学びあえるかを工夫した。授業の学びや授業のアイディアなどについて、毎回参考になる視点やまた皆で考え直す必要がある視点などを中心にできるだけ全員分取り上げ、次週にプリントにまとめて公開、コメントをし、学生が共有できるように努めた。

- ・感想を全員の分、公開して、毎回のようにコメントすることで、授業内容に深みが出るということにつながるし、自分の意見を見てもらえるということに気づけた。

- ・授業後に多くの人の意見をプリントで共有できるようになっていたのも、授業のアイディアや感じ方、見方の違いを知る事ができ、発想する視点を豊かにすることができたと思います。

- ・様々な人の考えに触れ、授業設計をする上での参考になった。全く自分が考えつかなかった授業プランも多数あり、刺激を受けるとともに、自分の授業構想の甘さも感じた。

- ・授業のなかで裁縫や調査の振り返りを行った際、自分が行ったときには感じたり、考えたりすることができなかったことを他の人の振り返りのなかから学ぶことができてよかったと思います。

- ・アクリルたわしやワッペン作りという教材から、様々な授業案が出てくるなど思いました。自分一人では思いつかないような授業が出たりして、実際に自分が教師になった時に参考にしたいと思いました。(後略)

- ・講義を受ける前にもっていた生活時間の授業のイメージは漠然としたもので、自分で考えた内容としては薄いものだったが、他の人の意見・考えを聞いたり、講義を受けたりすることで、おもしろそうな授業が思い浮かんだり、そのアイディアをひろえたりしたので、勉強になった。

という意見が多く、工夫の効果はみられたと思う。

#### ⑤その他

以上のような工夫をしたなかで、家庭科の本質である、生活の振り返り、生活での実践、生活の改善などに学生自身が取り組もうとする以下のような態度がみられた。

- ・自分の生活時間を見直すよい機会になった。

・春休みに長期間帰省する予定なので、その時は自分の生活時間だけでなく、家族の生活時間にも目を向け、協力していこうと思いました。

・自分の食生活や普段の生活をふり返る中で、自分の生活の中の問題点にも気づき、改善しようと思ったので、児童にも自分と関連づけて学ぶようにすることで、学びを深められることがわかった。

・私がもし家庭科を教えるとしたら、「まずは、自分自身の生活改善を目指します。」

また「2回生後期になってぐっとさまざまな教科の指導案を書く機会が増えたため、この授業で得た指導案づくりの方法・ポイントなどが他の教科にも応用できてとても助かった。」「子どもたちの実態を踏まえた上で、授業を構成するという話を聞いて、子どもたちの生活を見つめた上で考えていくことの重要性を改めて感じ、そのような姿勢を家庭科だけにとどまらず、全ての教科で生かしていきたいと思いました。」という意見もあり、家庭科だけにとどまらず、他の教科にも活かせるような学習内容に少しはなっていたのではないかと思う。

### 3. 次年度への課題

今年度取り組んだ様々な工夫により、学習の効果もかなりみられたと考える一方で、よりよい授業にするための課題も多く見出せた。

#### ①初等家庭科教育法において

まずは、初回の授業で「もっと授業設計をじっくり考えたい。」「もっと考える時間が欲しかった。」という意見が多く寄せられたので、次回からは時間を取るように心掛けた。次回からそのような意見はみられなかったが、6回という限られた授業の中で多くのことを盛り込んだので、少し掛け足になり、学生にとってはハードな授業になったことは否めない。今後は、授業内容をさらに精選していきたい。そして、初回に「どのような意図があって作業をするのか、もう少し説明してほしい。ただ、学生にやらせるだけはやめてください。」という意見があり(1名)、このような学生主体の授業を行う際、もう少し丁寧に説明を行わなければ意図が伝わらず、不満を感じる学生も出てくるので、改善していきたい。

また、最終アンケートにおいて「家庭科教育についてもっと学びたかったこと」を聞いたところ、「特にない」という意見が多く、また「この授業自体が私の家庭的なキャパをはるかに越えていたため、もっとという気持ちはないが、達成感はある。」という意見がみられた。

その一方で、意見を書いた人の多くは「模擬授業

をもっと見たかった」と感じており、なかには「模擬授業をしたかった」という学生もいた。また「指導要領の内容と授業の関連についてもっと学びたかった」「指導案や支援方法に関することを長くやって欲しかった」「授業支援案を通して、教材・教具の工夫について」「支援案についてもっと指導をして頂けたらありがたかった」「支援案についてのフィードバックの時間がもう少しあったらよかった」「机上での学習のおもしろくないというイメージをなくすにはどうしたらよいかもっと学びたかった」「各領域の結びつきを考えた授業づくり」「実際の授業の様子をもっと知りたい」「実践された授業にふれたい」「映像だけでなく、実際の子どものワークシートや作品を見たい」という意見もあり、授業構成、学習内容などの検討、有効な教材の精査をさらにを行い、より実践的な授業にしていきたい。

#### ②「初等家庭」との連携、「初等教科研究」の内容検討と位置づけについて

学生の授業中の反応や「基本的な家庭科の知識が欠けているので、もう一度各領域のポイントを知りたかった」「自分は家庭科の専門的知識が乏しいため、なかなかよい授業展開が自分では思いつきませんでした・・・」という意見から、高校までに学習した家庭科の基礎知識・技能はあまり身につけていない状況がわかった。高等学校までの家庭科の学習をベースに授業を行っていたが、基礎的な基礎知識・技能も補完するような形で今後は行わなければならないと考える。

また、最終アンケートでの「家庭科教育についてもっと学びたかったこと」では、「栄養素について」「調理実習をしたかった」「調理実習の指導法」「調理実習時の留意点(安全面・衛生面)」といった食領域、「環境に配慮した洗濯のしかた」「ミシンの使い方」「縫い方を覚えたい」「裁縫があまり得意ではないので、それらの領域を学びたかった。」といった衣領域、「快適な住まい方」「家の安全・掃除について」「住まいについて」といった住領域に関する専門的な内容についての要望が多く、また「環境面への配慮」「メディアリテラシー」「消費について」も、もっと知りたいとしている。

これらに関しては、今後「初等家庭」(各教科専門担当)と連携を図りながら、改善していきたい。また「初等教科研究」において、受講生が少人数という授業形態を活かし、「調理実習」「被服製作」「実験」などによる知識・技術面の向上とその支援方法の学習、教材研究、模擬授業の実施など学習内容を検討し、もっと学びたいという学生の意欲に応えていきたいと考えている。